

追悼の辞

著者	李 秉根
雑誌名	韓国語学年報
号	15
ページ	147-151
発行年	2019-04
URL	http://id.nii.ac.jp/1092/00001628/

安秉禧先生を思い出します

—10 周忌追悼論文集によせて—

時間が流れるということ、それも人生の一部分ではないでしょうか。もう安秉禧先生とお別れしてから 10 年が流れました。いつもわたくしのそばを、そして国語学を守ってくださった安先生の姿もすぐ浮かび上がらず、時には記憶が立ち止まってしまい、記憶がかすかになってしまう時があります。安先生のお宅は久しく麻浦 Mapo マポ*の終点の西の丘にあり、わたくしはその南の漢江 Han'gang ハンガン**の中州(?)***にいました。今は記憶がその中間の昔の終点でぴたりと止まってしまったようです。安先生は 10 年余り前にお亡くなりになり、わたくしはもう 80 歳にもなってしまいました。このように歳月が流れてしまいました。では残っている記憶をいくつか回顧し、その中間点になる麻浦のバスの終点に駆けて行って先生にお会いしようかと思ひます。

*【訳者注】ソウル西部の漢江の東部沿いにある区。

**【訳者注】ソウルの中央を流れる河

***【訳者注】ソウルの漢江の中に中州のようにある汝矣島 Yeouido ヨイド。麻浦の対岸にある。永登浦区 Yeongdeungpogu ヨンドウンポグに属する。

安先生とわたくしは 7 年という時間差でこの世に生まれました。1959 年春わたくしがソウル大学文理学部国語国文学科に入学した時、安先生は碩士論文をお書きになって学科の無給助教としていらっしゃいました。席にはほとんど見えなかったようです。多分他のところで国語を教えていらっしゃったようです。助教の机のあった「安秉禧」と書かれている黄色くあせた大学ノートの表紙が記憶に残っているだけです。わたくしが数年後にその席に座るようになるうとはまったく想像もできませんでした。

その翌年 2 年生になった時そこには故金明坤 Gim Myeong'gon キム・ミョンゴンという巨体の先輩が座っていたりしたのだが、安先生は 1960 年に建国 Geon'gug コングク大学に教授として移られてから 1 年後の 1961 年にソウル大文理学部で初めて「国語学特講」という講義をおやりになり、3 年生だったわたくしと同期の者や一部の先輩など 20 人近くで受講しました。わたくしは助教と学生を離れて今度は師と弟子の関係としての後学となったのでした。先生はまず言語学の諸分野を黒板にきれいに書きながら初講義をお始めになりました。(phonetics), phonemics, morpho(pho)nemics, morphemics, morphology, (morphosyntax), syntax, (semantics) ...等々です。それから今回の講義は主に 15 世

紀国語を中心として morphonemics から morphemics にわたって、即ち形態論(morphology)を中心となさるとおっしゃったが、途中である学生が突然「先生、用語が見慣れないものです。」と言った時、安先生はちょっと慌てながら顔が真っ赤におなりになったようでした。勉強する受講生には見慣れない講義の内容は一つや二つではなかったのです。これらのアメリカ式の利用はその時までには見慣れないものでした。アメリカ式の利用である phonemics の代りに主に phonology などのヨーロッパ式の利用が講義の時間を通して入ってきていたからだったようです。後で聞いたことではありますが、先生が講義をしておられたある高等学校の校長のお嬢さんと結婚式を挙げるに際し、結婚式場に入場する際新郎の安先生が怖気過ぎはしまいかと心岳 Simag シマク*李崇寧 Yi Sungnyeong イ・スンニョン**先生の奥様がコーヒーを入れて安先生に差し上げ、沈静させたと言ったことがありました。安先生は心岳先生のお宅に寄宿して奥様のお炊きになったご飯を食べて学生生活をしていた学生でした***。ソウル大の初講義で精いっぱい緊張した挙句、学生から出し抜けに質問ならぬ質問を聞いた瞬間慌てずにいらなかったのです。講義の内容は碩士論文である『國語研究』*** *7 輯のものが基礎となりました。この論文は一時国語学の碩士論文のモデルの役わりを担いましたが、わたくしもたとい現代語を土台とするとはいへ、学部の卒業論文の枠組みはこの論文と決めました。金完鎮 Gim Wanjin キム・ワンジン先生とわたくしは『15 세기 국어 활용어간에 대한 형태론적 연구 15segi gugeo hwalyongeogane daehan hyeongtaeronjeog yeon'gu』(15世紀国語活用語幹についての形態論的研究)という題目そのままに塔出版社から単行本で復刊し、学界に再度普及させることにしました。安先生が後書きを几帳面に書いてくださいました。

*【訳者注】李崇寧先生の号。当時多くの韓国人インテリは号を持っており、学生は「心岳先生」あるいは、本人がいない時は、単に「心岳」と呼んだりした。

**【訳者注】ソウル大学文理学部国語国文学科主任教授

***【訳者注】韓国では当時優れた学生を自宅に書生として置く教授がいたものである。

****【訳者注】この雑誌は大学院生のソウル大国語国文学科の碩士論文を収録している。

わたくしが軍の服務を終えて安先生がお守りになっていらっしゃった学科研究室の助教の座に座った1965年末のある日安先生が論文の抜き刷りを一部下さいました。建国大の『學術誌』に載せた「後期 中世國語의 疑問法에 대하여」(後期中世国語の疑問法について)(1965)でした。朝鮮語の特性をよく示してくれた本格的な morphosyntax の主題でした。それを夜通し読みながら膝を何度も

たたきました。「論文とはこういうものなんだなあ.」、「論文はこう書かなければならないのだなあ.」と言いながら感嘆しました。正確な例示とか整然とした論理とかすっきりした要約などは当時のわたくしを何度も驚かせた記憶が浮かび上がります。資料を中心として機能的な結論を導き出した恩師李崇寧先生の論文の方式ではあるが、当時のわたくしが多く見ていた論文とは全く異なる叙述方式でした。例示と要約的な説明などの方式は碩士論文の枠組みを維持したのは勿論でした。特に、例証として挙げた 15 世紀の資料を見ながら、あっ！ 心岳先生の言語資料の信憑性を高めるために講義の中で、また論文の中で数多く強調した文献の検証を経た *sampling* から得る結果がこういうものなのだなという考えをも抱かせました。もっと正確に言うならば、安先生の思考の基礎が正確さと厳格さにあるからではないかと思います。平素これを反映する言及によってこのような例を挙げることが出来るのではないかと思います。例えば、ある委員会で引き受けていた委員の職を辞退しようとする時に、言葉で辞退すると言おうとするならば、言葉でだけ依頼された場合であり、辞退書を提出する場合には書類で移植された場合であり、この 2 つの場合をはっきりと区別せよということでした。安先生が生涯の末期に韓国書誌学会の会長をなさった来歴はあの方の持って生まれた厳格な性格にさらに早い時期に芽生えた文献資料のすっきりした *sampling* の過程を経たためではなかったろうかという思いを持ったりもします。どうかして外部から論文を受け取り、わたくしの研究室にいらっしゃって特に地方刊行の古書を通じた方言の現状の研究論文の中に文献考証もなしに文献目録だけを提示して方言の実現の例示を通じて論旨を展開させる場合には熱を込めて論駁なさったりしたことが何度もありました。文献考証の書誌的な基礎がまったく出来ていなくて厳格な *sampling* を経なかった場合のことでした。特に文献資料の信憑性の問題は必ずそれに依ってから進むべき事柄なのでしょう。

1968 年ソウル大学には基礎教養教育(*general education*)の強化のために教養課程部という機構が新設されるに伴い、安秉禧先生はここソウル大学教授として移られて、その国語科課程を担当され、わたくしも文理大研究助教からその有給助教に場を移し、安先生と同じ職場の家族の一員となりました。ある歳のいった専任の教授がわたくしに助教の任務以外の個人的な研究を行うための一部のアンケート資料調査を頼んだことがあったのですが、安先生はそれは助教の仕事ではないと言ってこれを制止してくださったりしました。2 年後わたくしも恩師たちと周りの先生方のご配慮により 30 歳の若さでその専任講師に発令を受け、勤務するようになりました。分をわきまえず言わせていただければ、安先生と職場の同僚となったわけですが、この時から安先生の教えと指導をもっと続けてたくさん受けたりもしたのでした。世間を生きていく方法を学びもしま

した。安先生の行政能力と学科運営はまるであの方の論文のようにとても明快に見えるばかりでした。目下の者の面倒をうまい具合に見るのも表には現れないが、深みがありました。学問的な対話はあの方の学問がもともと高くて注意深く、ほとんどお伺いできませんでした。時折むしろ安先生の方が方言資料と近代国語の関連性について話しを引き出し、わたくしの考えを尋ねたりしました。表記と発音との関係が現代方言にどう反映されたのかということ等近代国語の核心でありながら難しい質問が多かったものと記憶しています。1970 年を前後してある事情があってわたくしも心岳先生のお宅に半月ほど長くない期間寄宿することになったのですが、日帝強占期*の敵産家屋**の玄関の隣の部屋でした。まさにその部屋は由緒あることには安先生以外にも西江 Seogang ソガン大の鄭然燦 Jeong Yeonchan チョン・ヨンチャン先生、淑明 Sugmyeong スンミョン女子大の蔡壘 Chae Hun チェ・フン先生など何人もの方が先生と関連があることについて議論をしたりもしてくださいました。わたくしとしては勿論分に余ることであり、時には当惑する時もありました。

*【訳者注】朝鮮総督府時代に対する韓国側の呼称。

**【訳者注】日本人家屋に対する韓国側の呼称。多分李崇寧先生のお宅は京城帝大教授の官舎だったと思われる。

1975 年ソウル大の総合化によって人文学部の教授として一緒にそちらに移り、研究室が隣り合わせになった時にも安先生は変わりありませんでした。安先生は同じ学科の李基文 Yi Gimun イ・ギムン、金完鎮 Gim Wanjin キム・ワンジン先生と同じくわたくしには近寄りがたい方でしたが、学界と学問を共に牽引なさりながらわたくしにも深い配慮をしてくださったりしました。わたくしの一生は恐らくひょっとするとこのような配慮の中で諸先輩に甘やかされて過ごした歳月だったわけです。

1970 年代には国語学会などで安先生にお願いして役員を一緒にしたこともありますが、やはり明確な処理をなさいました。安先生の重みのある論文は『震檀學報』と『国語學』に多く掲載されました。震檀學會では今は「伝統になった「古典シンポジウム」で早い時期安先生が「訓民正音」の主題発表をなさったことがあり、わたくしが役員でいた時には「月印釋譜」の主題発表をお願いもしました。その時国立博物館の大講堂がぎっしり埋まったという記憶があります。

学界についてのお考えも広がったです。1970 年代後半に心岳先生の 70 歳を前にして記念論文集を準備する過程で相談申し上げたことがありましたが、当時までは国内で還暦記念論文集の他には七旬または古希記念論文集が刊行されたことがありませんでした。われもわれもとこのような記念論文集を刊行しようという風土を心配して考え直すようにとおっしゃいました。学界のためのお考えだと思い、わたくしもためらいました。二三日後安先生がわたくしの研究室に

いらっしやって現代国語学を開拓なさった心岳ほどのような方ならば刊行してもよいだろうとおっしゃり、むしろ考えが足りないとしてその翌年「李崇寧先生古希記念国語国文論叢」(1977, 塔出版社)を刊行することになりました。その後2008年に李崇寧先生の誕生百周年記念論集「李崇寧, 現代国語学の開拓者」まで刊行するに至りました。

そうかと思うと、恩師を思うお気持ちはこの上もありませんでした。李熙昇 YiHeuiseung イ・ヒスン先生の著書「한글 맞춤법 강의 Han'geul majchumbeob gang'eui」(朝鮮語正書法講義)(1989)に手を加えて修正版を出したことは恩師を心から大事にしなければ出来ないことでしょう。そして紆余曲折の末に南山 Namsan ナムサンの韓屋村に困難の末に建てることになった李熙昇先生を称賛する追慕碑は安先生の積極性でなければ建てられることもありませんでした。心岳先生がお亡くなりになって何年か後のことでした。当時国立国語研究院長の職にあられたある日大学の研究室にいらっしやると、心岳恩師を「今月の文化的人物」に推薦したらどうかというのでした。ところでわたくしは、その当時文化観光部次官が心岳先生の御子息の友人であることを考慮して反対しました。後に推薦を放棄したとおっしゃったのを聞いてやはり恩師を心からお考えなんだなあと、安先生に恐縮したことがありました。何か月か後に政府では文化観光部の推薦を受けて心岳先生に金冠文化勲章を追叙しました。

国立国語研究院に在職中のある日でした。多分還暦の頃だったようです。平素安先生と大学の同期で特別に親しく付き合っていた言語学科の成百仁 Seong Baegin ソン・ベギン教授がわたくしの研究室にお寄りになって、「安秉禧教授が悪い病気にかかったようだ」と言って病気の話を聞かせてくれました。青天の霹靂でした。本当にお気の毒でした。幸いにその間「三一文化賞」をお受けになりました。そして数年を経て訃音を聞くことになりました。埋葬地に行きました。名残惜しい気持ちで最後のお姿を見るためでした。傍で弟にあたる安秉奎 An Byeong'gyu アン・ビョンギョ前国会議員が「兄弟がみな亡くなり、僕だけ残った。」と話した声が今久しぶりに聞こえてきます。安先生！どうか静かにお休みになり、生前わたくしたちにお話くださったそのお言葉と行動でもって後学たちを前と同じように引っ張って行ってくださいようお願い申し上げます。

2018年10月
後学李秉根二度拝す